

---

# ダブルストーリー

uniuni

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダブルストーリー

### 【NZコード】

NZ472Z

### 【作者名】

uniuni

### 【あらすじ】

なぜ俺と恋人の晴香がここにいるかわからない。

突然現れた非日常。

魔物とか魔獣とかがひしめく、死と隣り合わせのこの世界で生きていくしかないのか。

頼りはゲームみたいな能力のみ。

生きている意味とは何だろう。

答えのない答えを探したい。見つけたい。

## 最初の最初（前書き）

初めて書きます。

正直うまく書けている自信はありません。  
だけど、自分が読んでみたいと思えるようなものが書けたら、いい  
と思っています。

少しだけ、お付き合ってください。

## 最初の最初

（）

「右！！」

不意に鋭い突風が木々を薙ぎ倒しながら向かってきた。

「メガエアロ！！」

パートナーの晴香がすかさずスキルを使い、木々をなぎ倒しながらこちらに向かつて来る魔法を相殺する。

「目標が来たよ。数は3。くるよ。」

「了解。右からいくぞ。」

俺は腰にある剣を引き抜き、剣にスキルを這わせながら敵に向かつ。

「ガイアソード！」

今回の目標であるハイゴブリンは知能も高く、連携もしてくれる。

俺の前には大きめの盾とナイフを持ったハイゴブリンが立ちふさがり、後ろでブロードソードを持ったハイゴブリンが隙を窺っている。しかし、一番警戒しなければならないのが、後方で杖を片手によくわからない言語をぶつぶつ呟いているハイゴブリンだ。

通称マジックゴブリンだ。さつきの突風もおそらくこいつのエアロ系統のスキルだろう。

このマジックゴブリンは、かなり高いレベルのスキル使えるのが

特徴だらう。

ハイゴブリンの盗伐の難易度が高いのは、連携力とのマジックゴブリンの能力のせいである。

俺は盾を持ったハイゴブリンの側面からガイアソードのおかげで切れ味の上がった剣で切りつける。

ブチュッという鈍い音が鳴り、盾を持ったハイゴブリンを盾ごとあつさり斜めから両断する。

俺はガイアソードの効果が切れないうちにブロードソードを持ったハイゴブリンに向かい、足を切り飛ばし体勢を崩した後に首を刎ねる。

「ファイヤー！」

後方から晴香のスキルを叫ぶ声が聞こえ、火の玉がマジックゴブリンを通過して上半身が灰になる。

うめき声も上げられずに灰になつたハイゴブリンを横目に、俺は大きく息を吐き出す。

今回もまた生き残れた。この感情はいつも強く、一番強く自分の中に残る気がする。

日本の群馬に生まれて山の中で育ち、現代人よりも自然に親しみを感じているが、平和な世の中でこんな生き死にを左右する事態はあり得ない。想像つくわけがない。

こんな殺伐とした生活が始まつて一ヶ月。

生々しくもあまり現実感の無いこのバカラらしい世界に俺と晴香がいる理由を説明するには、一ヶ月前に遡る必要がある。

／＼＼

## 一話～普通のやが貴重～（前書き）

よく物事には正解がないというけれど、もし小説の書き方があるなら教えてほしい。

そんな今日この頃。

基本も何もあつたもんじゃないな。これで小説として成り立つているか不安。

ですが、懸命に書かせていただきます。

## 一話～普通こそが貴重～

「やー」右じゃない？」

「さつき通つたじやん。レアいなかつたし。」

俺と恋人の晴香はパソコンに向かっていて、少し前に流行ったネットゲームをやつている俺に、晴香がちゃちゃをいれる。

最近は部屋でこんなやり取りをしていることが多い気がする。もちろん普通のデートなんかもするが、晴香は俺のアパート入り浸りで、大学の講義や友達と遊ぶ時以外の時間は俺の部屋にいることが多い。

こいつやって俺がネットゲームをしている姿を晴香はよく目にしているし、ゲームを見ているのが好きなようで、ネットゲームをしているときによく近く（近くというか膝の上）で座つて見ている。そのせいか、かなり内容に詳しい。ステージのレアな敵の居場所とか武器のつくり方とか、知識がなかなかコアになってきた。

それにしても俺がこのネットゲーム、「ストレートストーリー」をやり始めて早三年が過ぎた。

大学の入学当時、初めてできた友達に薦められて始めたこのゲームは、今までしてきた家庭用ゲームとは違ひ友達と一緒にでき、なつかつゲーム内で友達ができるという俺にとつては革命的なゲームであり、俺がハマるのにはそんなに時間はかからなかつた。

このゲームにハマつて、それからの俺の行動は自分でもかなり早かつたと思つ。

中学の時の友達に頼み、快適にゲームができる性能のパソコンを組んでもらい、経験値の多く入るアイテムや強い武器をネットマネーで買あさり（まあ、常識の範囲内ではあるが）、どんどん熱中していった。

まあ、最近は更新のマンネリ化が進み内容があまり面白く思えなくなってきた。いる。

主キャラクターは常にカンストさせているが、最近ではいろいろ職業のサブキャラクターを作つて楽しんでいるような状態だ。

晴香の頼みで女のサブキャラクターもいくつか作つたし、正直遊びつくしている感が強い。

今も晴香のお気に入りの女のサブキャラクターでストーリーを進めていて、いまボスを倒したことによりレベルが上がった。

晴香がいる時は女のサブキャラクターでゲームをすることが多く、入り浸つている今では男のサブキャラクタより女のサブキャラクターの方がレベルも高くなり、晴香も「満悦みたいだ。

「ねえ、もう一時だよ。そろそろ寝ようよ。」

「もうそんな時間か。明日は横浜に遊びに行くし、そろそろ寝なきゃか」

「そうだよ。久々に遊びに行くんだし、ゆっくり寝て明日は楽しまなきゃね。」

「じゃあ寝るか。布団剥ぐなよ。」

「そんなんに寝相悪くないもんね。おやすみ。」

そんないわいもない会話をして、俺たちは寝た。

そう。

確かに俺の部屋の俺のシングルベッドで俺と晴香は寝たのだ。  
これが俺達の見た最後の現実だった。

## 一話～消えた当たり前～

「んん。ん？おかしいな。ベッドに陽があることなんて・・・え、  
ビビ。」

顔に眩しい陽を浴びて起きた俺は、わけがわからなかつた。  
理由は簡単。部屋に一切見覚えがなかつたからだ。

木目の鮮やかな木造の部屋で窓が一つ。  
ベッドとテーブル、椅子以外には何もなく、物もテーブルに林檎と  
梨が入つたバスケットがあるのみ。

唯一、見覚えがあるのは同じ布団で寝ている晴香だけである。

「おこ。おこ晴香。」

「なにこ。もう出かける時間？」

「違う違う。マジで起きてる。」

「うーん。わかつたみつ。おは・・・。」

「わかんね。俺もさつき起きたとこ。」

「・・・誘拐とか拉致じゃないよね？でも縛られたりしてないしなあ。

「うーん。まあ、とりあえず落ち着いて状況を確認してみるか。」

「やつするしかないかな。ん？」のメニューってなに？

「メニュー? なにそれ?」

「あそこの。。。あれ動いた。なんか右上にびずつと書いてあるんだよね。」

「え? あ、ホントだ。なんだこれ。メニュー。つてつあ……」

「どうしたの? ! え?」

「なんだこれ。」

俺の目の前にはノート大くらいの画面らしきものが出現していた。まるでタッチパネル式のパソコンの画面で見るようなもののように、突然目の前に出てきた。

薄く淡い光で包まれているそれは側面から見たらものすごく薄く、まるで投射機で白い布に映像を写したかのような様子だ。

そこには「アイテム」「ステータス」「スキル」「スキルノート」「鍊成」といった項目があり、右上には俺の名前である「仁」と書いてある。

「なんかメニューつていったら出たぞ!」

「メニュー。あ。ホントだ! ! 私も出た! !」

とりあえずためにタッチパネルの要領で「ステータス」を押してみるか。

（）

職業：剣聖」「150、槍使い」「74、魔法剣士」「60、忍者」「58、

聖拳士」「51

合計 L : 393

S P : 393 / 393

H P : 10 M P : 10

A : 10 D : 11

M A : 10 M D : 10

武器 : なし

防具 : スウェット

{ }

と出できた。・・・なにこれ。

「なにかのゲーム?」

画面を見た晴香がそういうのも無理はない。正直俺もそう思った。

「防具がスウェットってことは俺のことか?ってかステータス!レベルの割に低くないか?10って。」

「うーん。私も出してみるね。」

{ }

職業 : 魔道士 L : 111、神官 L : 83、狩人 L : 102

合計 L : 296

S P : 296 / 296

H P : 10 M P : 10

A : 10 D : 11

M A : 10 M D : 10

武器 : なし

防具 : パジャマ

{ }

「レベルは違うけど、ステータス一緒だね。」

「同じだな。どういふことだ？」

「うーん、何でだろうね。とりあえず他のも見てみる？」

「そうだな。とりあえずスキルを・・・何にもかいてないな。」

「私もだ。何もないね。」

「ほかのも見てみよう。」

アイテムもお互いなにもないし、練成にも何も書いていなかった。  
ただ、スキルノートには職業項目があり、試しに仁の項目の「剣聖」を選択すると「剣技L1」や「身体強化L1」などの項目がありその隣には「必要SP1」などのことが示されていた。

試しに仁の項目の剣技L1を選択すると文字が金色に輝いた。

どうやら、SPを消費してスキルを取得することができるみたいだ。

「てかさ、この項目ストレートストーリーのスキルプレートに似ていない？」

確かに似ている。「剣聖」とか「魔法剣士」とか、職業に書かれているやつは全てストレートストーリーの職業と符合するし、剣技L1って剣士の初期のスキルにあつた気がする。

でも、ストレートストーリーは一人のキャラに一つの職業だった。スキルノートを見るに、俺も晴香も複数の職業を持っているみたいである。

「なんか似ているよな。そっちのスキルノートは、どう?」

「ファイヤとかアイスとか色々あるよ。ファイヤ押したらメガファイヤっていう項目でてきたし。なにこれ。ていうか、ストレートストーリーまんまじやない?」

「だよな。剣技L1押したら剣技L2出てきたし。スキルプレートまんまだよな。」

「『めん、混乱してきた。つまり私たちは視界の右上にメニューつけて書いてあって、メニューつて言つたらタッチパネルしきものがてきて、それを開いたら「ストレートストーリー」そのまんまなスキルノートという項目と同じ職業が書いてあつたと。あつてるよね?』

「たぶん。合つてるはず。てかわけわからん。起きたら知らない所にいるし、変なタッチパネルみたいなのが出てくるし。なんだよこれ。」

「人生でこんなにわけがわからないの初めて。こんなに落ち着いている自分が逆にびっくりだよ。」

「ていうか、メニューの話になつて話が切れていただけど、まずここどこ?」

「ううん。どこだろ?」

メニューを閉じ(メニュー。といったら閉じた)最初の疑問に戻る。しかしながら、周りを見てもさつき見た殺風景な部屋の様子しかなく、よくわからないよな。

「窓から見た感じ外は森みたいだな。他に窓から見てわかることがないなあ。」

「やあ、起きたのかい。僕はベン。昨日はもう寝ていたみたいだから僕も勝手に隣のベッドで寝させてもらつたよ。それにしてもいいなー。僕もパートナーが欲しいよ。一人旅は寂しいからね。」

金髪のひょひょした男がドアから入ってきて、いきなりそう告げた。

俺と晴香はいきなりのことにフリーズし、俺より先に復活した晴香が恥ずかしげに叫んだ。

「えええ？！あなた誰よ？！寝させてもらつたって、勝手に隣で寝るとかダメでしょ！！」

「ん？一聲かけずに寝たのは申し訳ないけどさ。ここは旅人用に派遣会社が建てた小屋だから、宿泊は自由でしょ？そんなに怒らなくてもいいんじゃない？」

「旅人用に？派遣会社？」

「そうだよ。君たちも何かの依頼でここに来たんだろう？・・・ていうか君たち荷物は？武器も持たずに何故こんなところに？」

ベンと名乗った金髪君は、訝しげな表情でそう聞いてきたが、俺達はそれビビりではない。

「依頼？武器？・・・ベンさんでいいのかな？まず教えて欲しいことがあるんだけど、――？」

「へ？」「どうして変な質問するね。ここはオイル領のイルドの森だろ？何いつてんの？」

「（知らない地名だ。）や、そつだつたね。まだ少し寝ぼけていたようだよ。」

「変な人だな。まあいいや。僕はもう出るから。またいつか。」

そういうベンさん（年齢的に君か？）は、肩から掛けられる位の大きさのカバンと剣を持ち、さっさと小屋から出て行つた。・・・  
つて剣？？

「・・・なあ晴香。彼、剣持つてたよな？」

「・・・うん。」

「・・・銃刀法違反だよな。」

「・・・うん。」

マジでこれはどうこうことだらう。しかも彼は俺達が武器を持つてないことに驚いていた。

てことは外には危険があるということか？・・・えええ？？！

「こりゃまいった。迂闊に外に出れなくなつたな。」

「え？ なんで？」

「さつきの彼の言動的について、外には武器を持たないと危険な何

かがあるみたいだ。くわづ。彼からもつと情報が得られれば良かつたんだが。」

「え？ え？ なにそれ？ どうこう」と？ 「え？」

「とりあえず落ち着け。晴香。大丈夫だから。」「

一体何が大丈夫なのか自分でさっぱりだが、晴香が混乱しては何かと困る。

とりあえず落ち着くのを待つか。

「大丈夫？ そう、大丈夫だよね。ありがとう。」

「おう。じゃあまあ、今わかつてることをひとまず確認しよう。」「

今わかつてることは、ここはオイル領のイルドの森といふところで外は武器がないと危ない。

地名からいってここは多分日本ではないだろう。

あと、この小屋は派遣会社といふところが建てたらしい。

メニューといふとゲームのウインドウみたいなものが現れる。

メニューにはいろいろな項目がある。

とこつことくらいだらう。

「うーん。だとしたら今調べられるのはメニュー位かな？ 他のは調べようがないよね。」

「そりだな。メニュー。・・おーなんかステータスが上がってるー。」「

「えー・・ホントだ。全体的に上がってるねーなんでだらう？。」

「・・・多分スキルノートの剣術L1を取つたからだ。次に出た剣術L2を取つたらまた上がつたから間違いない。・・・晴香。これはホントにバカみたいな想像かもしれないけど、ここはゲームの中かゲームみたいな場所なんじゃないかな？」

正直今のところの状況的にはその可能性は低くない。

普通に剣を持っている人。

メニューなんていう画面。

地名。

さつき会ったベンさんの言動。

正直ドッキリとかじやない限り十中八九この推測は合つているだろう。

「・・・やっぱり今のところはその可能性が高いかもね。」

晴香もおっとりしているがバカではない。

現状をみてその可能性が高いのはわかつたようだ。

「とりあえず。今ところはスキルを取つてステータスを上げといた方が無難だな。このステータスが本当に身体能力を上げてくれることを祈るう。」

「・・・仁。この世界は私たちの知らない世界で間違いないみたいだよ。」

「はあ？ 晴香何言つて・・・それなに？」

「ファイヤだつてさ。さつき取つたスキル。言つてみたら出たんだ。

「

・・正直これが一番驚いたかもしれない。

晴香の右手の上には火の玉が浮いていた。

赤く燃える火の中に青い部分があり、明らかにガスコンロとかでみる『火』そのものみたいだ。

「・・晴香。それ熱くないの？」

「不思議と熱くないのよね。てかこれどうしよう。消し方わからないんだけど。」

「マジか！つーん。とりあえず外に投げるのが無難か？晴香できるか？」

「やつてみるね。」

そんなかわいく『やつてみるね。』とか言つてるけどそれ威力未知数なんだからそんな軽くいう。・・・この威力あり得なくね？

半径2M位のクレーターできたけどあり得なくね？

「・・・ははあ。」めん。こんな威力出るなんて思わなくて。。  
あのぉ、本当にごめんね？」

「・・・オッケエイ。とりあえず現実逃避は後にしよう。何この威力。あははは。とりあえず初期ステータスでこの威力なら自衛には問題ないはず。つてか、この威力で魔法使つて生き残れないなら俺達は生きていけないから、大丈夫。あははは。」

「・・・お願ひ仁。壊れないで。マジお願ひ。とりあえず武器がない以上、魔法が私たちの生命線だよね。どんな敵が出るかわからないけど、この威力ならきっと生き残れるはずだよね。」

「・・・ホントに日本じゃないんだな。戦争のない日本に生まれた俺達が魔法とか。あはははは。」こんな皮肉はないよな。あはははは。

「

「仁、戻ってきて。ホントに勝手にスキル使ってごめんなさい。大丈夫??」

大丈夫なわけあるかああああああーー！  
・・・はあ、どうするか。

## 二話 ～生きる術～

とりあえずメニューをいじってわかったことがある。

基本的には「ストレートストーリー」のスキルプレートとメニューのスキルノートは同じものである。

しかしながらステータスの面でいろいろ違った点もある。

ステータスを上昇させる効果のスキルは名前の最後に「技」が付くスキルであることが分かり、基本的に最後に「技」が付く名前のスキル（剣技や槍技など）のステータス上昇効果は重複しないが、複数職を持っているため例外的に重複してステータスを上昇させるスキルがあることがわかった。

またその上昇値はその職のレベルに対応しているようだ。

分類として「剣技、槍技などの直接攻撃することを目的とした物理技系」、「魔技」、「聖技」の三種類に技系は分けることができ、その三種類はステータス上昇が重複することが判明した。

このことが分かったおかげでステータスは最初と比べるとかなり値が上昇した。

また、これによってSPの無駄使いが無くなり、攻撃スキルや回復スキルなど効率よくスキルを取ることができることとなつた。

幸いにもファイヤなどの詠唱するタイプのスキルは、二人とも自分の職にある分は取得することができた。

武器のない俺達にとっては生命線となる魔法系スキル。

これができるだけ取ることができたのは本当に助かるし、生存率が上がるだろう。

というかものすごく便利な項目があつた。

それは「鍊成」という項目だ。

その項目には自分の所持している物が表示されており、メインやサブなどの選択画面によつてその物を選択すると練成することにより新たに作ることができる物が表示される。

たとえば、俺達がさつきまで寝ていたベッドのかけ布団と俺が着ているスウェットを選択したら「布のジャケット」（必要MP10）、

「厚手の服」（必要MP5）などの項目が出た。

どうも「布のジャケット」の方が「厚手の服」より必要MPが多いことから上位の装備品らしい。

布のジャケットを選択すると今度は「布のジャケット+1」（必要MP20）、「布のジャケット+2」（必要MP30）、などの項目が出てきて、どうもMPをかけければかけるほど上位の装備品になるようだ。

正直、今俺達が着ているスウェットとパジャマとこいつ薄着では寒い。ホント寒い。

小屋の中でも寒いのだから外に出ることなんかマジで無理……な状況である。

とりあえず、俺のスウェットはかけ布団と合わせて「布のジャケット+10」（必要MP110）を作ることにした。

ピカツとした光とともに右手に持ったかけ布団と着ているスウェットが消えて、俺はそれなりに暖かそうな服一式を着ていた。  
そこまで着ていたスウェットと違い、ぴちっとした茶色のズボンに白いシャツ、その上にズボンと同じ茶色で布地のジャケット。  
ちょっとオシャレでいい感じである。

「仁いいなあ。私もなんかかわいいの欲しいなあ。」

「じゃあ、晴香も服練成しなよ。つてかしなさい。寒いだろうじ、

何よりその格好はアカン。」「

・・・正直言つて晴香は結構かわいい。  
なぜこんなかわいい子が俺と付き合ってくれたのか全然わからない  
くらいである。

そんな晴香のパジャマ姿は外を歩くには少々セクシー過ぎである。

「ううかなあ。それじゃあ、私は、枕と毛布貰うね。」「

晴香は鍊成にパジャマを使わないみたいだ。

枕と毛布が光り輝き、光がなくなつたときには厚手の布とかが晴香  
の腕の中にあつた。

「布のローブ + 11 だつて。色も赤くてかわいいし、いい感じだね。」

「

「ああ。他に鍊成するものは・・・ん?これは。」

果物の入つたバスケットの中にはステーキを食べるときに使うよう  
なナイフが置かれていた。

おそらく皮を剥ぐために置かれていたのだろう。

「これで武器作れないかなあ。」

「できそつだけど、なこと合わせるの?..」

それが問題だよなあ。

ん?

・・・これは灯台もと暗しだ。

「もう布団とかも勝手に使つてゐし、テーブルとか使つたらダメかな？」

「いいんぢやない。やつちやえ。」

オツケイツ。

ナイフとテーブルつと。

これでできるのは「木刀」（消費MP5）「ショートソード」（消費MP10）「槍」（消費MP10）か、残りMPは97。  
さつきは96だったから1回復したみたいだ。

これでMPは時間が経つにつれて回復することもわかつたし、後は武器をどれにするかだよな。

剣聖の剣技L10を取つたから槍は論外。

多分個体としてはショートソードの方が強いけど、+補正観点からしたら木刀が+18、ショートソードが+8と木刀の方がかなり高い。

この補正がどうかかわるかが問題だ。

・・・まあ、正直日光とか行つたときに1000円の木刀とか買つていたし、木刀の方がいいかもな。  
・・・あれ？

「晴香。今MP減つてる状態だけど、全回復してから練成した方が強く練成できるみたい。そうしてもいいかな。」

「いいよ。太陽的にまだ午前中みたいだし、少しうつくりしようか。」

「

「あと、ステータス的に晴香の方がMPが100多いし、晴香が鍊成してくれ。木刀で最大まで+つけてくれ。」

「

「了解。でさあ、一昨日学校でミキがさあ。・・・」

俺達が他愛もない話をしていると体感で1時間くらいで晴香のMPは全回復した。

MPは体感1時間で200くらい回復するようだ。

これも覚えておこう。

「じゃあ鍊成するね。・・・ん?」

「どうした?」

「木刀+20の次に魔木刀って表示になつたよ。+は19まであるかな。」

おそらく魔木刀は木刀の上位武器だらう。

そっちの方がいいな。

ていうか、やっぱり晴香のMPはすごい多いな。  
俺の1・5倍とかすごいわ。

「じゃあ、魔木刀+19を鍊成してくれ。それでMPがある程度回復したら外に出てみよう。街とか人のいる場所まで行けたらいいんだけどね。」

「わかつた。とりあえず作るね。」

ナイフとテーブルが光り輝き、黒くて長めの木刀が現れた。  
持つところにいくつか六芒星が赤く刻まれていて、柄から見るに鉄芯が入っているようだ。

「なんかかっこいい木刀だね。黒いところは家にあった木刀に近い

「ねえ」

「・・・かつこいい！マジかつこいい！」

「良かつたね。私は職業的に持つていなくとも平氣みたいだけど、仁は持つていた方がいいよね。」

そうなのである。

暗香の職業は魔道工 神官 狩人の三つであるが その三  
てレベルが高い。

ちなみに俺の「100以上は剣聖のみ。

た職業と狩人というバランスも良く素早いという職で、素早く回復系スキルや魔法系スキルを使えるというところである。

まあ あくまでこの世界がストレーハートニーと聞こむ、  
な世界であるとしての推測ではあるが。

畢竟、おにぎりを手に持つ勇気と、田舎にいることを強し、駄菓子屋で遊んでいたり、絵本で遊んでいたりする、というわけではないということだ。

逆に俺は武器が必須だ。

魔法剣士と聖拳士のおかげで魔法系スキルと回復系スキルも使えるが、中級レベルのスキルまでしか取れずMAも少ない。

魔法だけで大丈夫とは言えないだろう。

のみで、他は平均して低い。

どう考へても剣を使う必要があるだろ？

「とりあえずMPが回復したら外に出てみよう。街とかに行けるようなら行って、行けないようなら戻ってこよう。」

「そうだね。」

太陽が真上に来た時に晴香のMPは大体回復した。さて、そろそろ外にでるか。

「なにが外で起るか分からないから、用心していこうな。」

「あと、とりあえず魔法がどの程度使えるか確認しようね。」

「了解。」

田の前に広がる木々を前にして、二人して一緒に息をのんだ。

「よし！ 行くぞ！」

「うんー。」

バキッと小枝を踏みしめて俺達は前に踏み出した。  
さて、何が待つていることやら。

## 四話　～喜劇の始まり～

「トヘ。」  
「トヘ。

ゆづくづと鳴り響く足音。

一身に黒を纏い、ゆづくづと響き渡るオト。

悲しみのよつたな、怒りのよつたな。大きな虚しさが響き渡る。

いろいろな感情が入り乱れたこの通路で、虚空を見つめたオトコハ  
ワラウ。

「愛してくるよ。大切だよ。だからこそ、俺は鬼にならう。」

「君がどんな結果を迎えても、これが俺の最後のHIGAだよ。」

「結果君が死んでしまつても、俺はもう後悔はしない。」

「わかつてくれるだらう。俺はこうしたいんだ。」

狂氣なのか、狂喜なのか。

多分自分でもわかつてはいないだらう。

でもその姿を見たら皆、じつまつだらう。

「アイツハクルッテシマッタ。」

## 五話 ～覚悟と心の衝突～

「上のほうおお、ああいおおおお。下ばかりに向いてると転ばない。」

昔流行った「ナベヤキ」っていうを歌いながら、晴香は「一二三四」と歩いている。

懐かしい歌だな。

何気によくギターで弾きながらよく歌つたな。

・・・ハードロックバージョンで。

それにしても嬉しそうに前を歩いている晴香には驚かされる。自分でも混乱しているだろうに、場をというか俺を和ませるためにあえて明るくしているのだらうか。

・・・そりだよね？

「でも、あのヘンテコな塔に向けて歩いているけど、それが正しいのかな？」

「他に明確な目標がないんだからじょうがないだろ。適当に歩くよりはいいし、目印付けてるからさつきの小屋に戻れるから、まあ丈夫だろ。」

そう、俺達の前方には塔がある。

近代的なビルとかではもちろんなく、中世代にあつたであつたような煉瓦っぽい塔が見える。

赤茶けたその塔は、森の中にあるのがなんだか場違いなような気がするが、不自然な人工的感覚を惹起させる作りでありながら、不思議と違和感なくそびえ立っている。

頂上は『雲がかかりそう』などという装飾語が付きそつとほび高い

位置にあり、鳥が周りを飛び回っている。

俺達は木々に木刀で跡をつけながら、とりあえず俺達は人工物であるであろうその塔に向かっている。

もしかしたら人がいるかもしないし。

ていうか、この木刀はマジですごい。

同じ木であるはずなのに木をぶん殴っても折れないし、むしろ巨木と言つてもいいほどの木を碎き、木刀には傷も付かない。

マジすぎえ。

この魔木刀 + 19 !!

「でも、ゲームみたいで楽しいね。実は私も『ストレートストーリー』したかったんだ。なんだか嬉しいな。」

「言えばノーパソ貸したのに。俺も何気に晴香とゲームしてみたかつたかも。」

「えー。借りればよかつたかなあ。」

「そうかもな。でもストレートストーリーを一人でしていたら、こんな感じだったのかな?なんだかウキウキするね。」

「うん!なんだか嬉しいかも。それにしても木ばっかりだね。また誰かに会えたらしい・・・。キャツつ!!」

なんだ?

なんだなんだなんだ?

なんだあの黒くてでかい狸みたいなやつは。

てかあいつ。

晴香にぶつかつたよな。

ぶつかつたよなあーー！

晴香。

なにうずくまつてゐるんだよ。

返事しろよ。

おいーー！

・・晴香？

てめえ、晴香に何したんだ。

おい。

おいおいおいおいおいーー！

「ふりやあああーー！」

俺は木刀を振りかぶつた。

ズアアアンーー！

ちょっと前に晴香が見せてくれた「ファイヤ」が着弾した時より大きなクレーターが俺の振りかぶつた先にできた。  
てか、正直そんなことはどうでもいい。

俺の晴香に。

「俺の晴香に何をしたああーーー！」

昔地元で、車に轢かれた狸とか、蛇と戦っている狸を見たことがある。

昔見た狸は犬くらいの大きさだったが、こいつは大きめのイノシシ位ありそうだ。

無傷な様子を見るときのは当たらなかつたか！  
何気にすばしつこいこの狸は、さつきの木刀の一振りをよけていた  
ようだ。

・・・関係ない。

俺の晴香に手え出したんだ。  
ぜつてえ潰す。

「ギャアアアアアーー！」

「なめんなこらああああーー！」

奇声を上げながら突っ込んできた狸の鼻筋に思いつき木刀を振り  
おろし、つんのめつて動かなくなつたところに狸の腹を蹴り飛ばす。

「えあ？」

狸が吹っ飛んで行つた様子を見て、俺は思わず変な声を出してしま  
つた。

木を何本かなぎ倒しながら地面に転がる狸を見て、俺は素直に驚いた。

俺はいろいろな格闘技を習つてはすぐやめてという幼少時代を過ご  
し、一つの武道を納めたりはしなかつたが、喧嘩はそれなりに強かつた。

そんなこんなで喧嘩をしたことはそれなりに多かつたし、人間相手  
に蹴りを放つことはあった。

しかし、人間くらいありそうな体積を持つた物体が木々をなぎ倒し  
ながら吹き飛ぶ様を見たのは、当然ながら初めてだ。

「・・・つ。 晴香あーー！」

・・・呼吸はしているし、顔色もそんなに悪くない。  
ステータスも確認したけど、HPは7しか減っていない。  
しかし、状態が気絶になつていて。  
とりあえず晴香は無事のようだ。

・・・よかつた。

本当によかつた。

「・・・えつと、回復は・・・セイント」。

晴香を柔らかな光が包み込む。

膝の擦り傷とかちょっとした怪我が消えていく。  
自分で唱えておきながら、異質な光景だ。

「おい、晴香大丈夫か？おい？」

「つづん。 後十分うん。」

「おいしい！……起きろし……」

思わずつっこんでしまつたが、寝ぼけながら幸せそうに寝ている様子からいつて、多分平氣だろう。  
そんなにしないうちに目も覚めるはずだ。  
それにしてもさつきの狸はなんなんだ？  
いきなり現れて晴香にぶつかってきたけど、冷静に考へるとあんなのが野生でうわづらしているなんて危なすぎだね。  
まあ、これで間違いなくここには危険があるということが確実になつたな。

これから歩くときには周囲を警戒しながら行動する必要があるな。

・・・いいや。

とりあえず晴香が起きるまで少しごんごで休もう。

さつきの狸は少し先でピクリとも動かないし、腕が変な方向いでいることから狸が起きても大丈夫だろう。

ともかくスキルは現実に使えることがわかつたし、これからはそれが生命線になるだろう。

俺が使えそうなスキルで便利そうなのは・・・魔法剣とかいいかもな。

なによりかつこいいし。

さつきの様子から俺の身体能力は、今までよりかなり上がっているだろう。

なんていつたつてあんなでかい動物が蹴つただけで、木々をなぎ倒しながら吹つ飛んで行つたんだから。

「魔法剣は・・・エアロソード」。で、できたのか？」

魔法剣はというか、魔法系のスキルは基本としては四種類存在しているみたいで、ファイア系、アイス系、エアロ系、ガイア系が存在する。

魔法剣もそれに対応しているようだ。

晴香は闇属性の魔法系スキルを取得していたが、あれは多分最上位職である魔道士であるから取得できたのである。ストレートストーリーでもそうだった。

・・・いや、やめよつ。

「まかすのは。

この世界はストレートストーリーに準拠した世界なんだ。

認めよつ。

・・・こには俺達の世界じゃないんだ。

・・・まあいい。

とりあえず魔法剣の確認をしよう。

「これはすごいな。見えはしないけど剣からシュンシュンと音がするから、多分スキルはかかっているんだろうな。威力はどうかなつと。」

シュン。ズガガガガガガガガ！！

・・・。

異世界すげえ！！

何の手ごたえ無く木刀で木が切れた！！

結構この木太いのに！！

「ひゃーーーー、どうしたの？」

木が倒れる音で晴香は起きたようだ。

まあ、これだけ大きい音で起きない人間はないのか。

「魔法剣試してみたんだ。てか調子はどう？痛いとかは？」

「大丈夫。でもなんでこんなところで私寝てたの？」

「覚えてないのか？大きな狸みたいなのにぶつかられたの？」

「うん？あーーなにか衝撃があつたかも！！」

「気絶していたんだぞ。晴香。とりあえず回復はしといたけど。」

「ありがとう。んと、大丈夫みたい。それでその狸はどうなつたの？」

「あそこだよ。」

俺は狸が倒れている方向を指さした。

狸は未だにピクリともせず、さつきと同じ態勢で倒れていた。  
まわりの様子もさつきと変つておらず何本かの木がなぎ倒されており、・・・よく見たら結構派手に狸は転がっていたようだ。

「・・・これ仁<sup>じん</sup>がやつたの?」

「う、うん。俺がやつたて言つたが、その、蹴つたらこんな感じになつたといつか・・。」

「・・・なんだか異世界つて感じになってきたね。この様子だとスキルの効果もちゃんと出ているみたいだし。」

「・・・やうだな。とにかく危険があることが間違いなくなつた以上、用心して行こう。さつきみたいになつたら困るからね。」

「やうだね。さつきまで私ちよつと浮かれていたみたいだし、反省しなきや。」

「それと晴香。多分だけど、狩人のスキルの中に『索敵』ってなかつたか? 多分あると思うんだけど。」

「あーー! あつたねえそんなスキル! あれ使えばつまくすれば敵とかわかるもんね。」

「ナニ? じやあ、使ってみて。」

「うん。『索敵』」

もともと、索敵っていうスキルはエリア内の敵の場所とかを確認するスキルで、ストレートストーリー内ではかなり重宝するスキルだ。狩人系統の一次職で覚え、その後もずっとお世話になる優秀なスキルである。

俺の持っている忍者も上位職の暗殺者になれば覚えるが、忍者はまだ「58だからまだ覚えることはないだろ?」

「近くにあの狸以外の反応はないみたい。ていうかこのスキル便利だね!簡単な地図みたいなのが見えるよ!」

「よかつた。索敵の効果はこの世界でも優秀みたいだね。まあ、その地図は晴香にしか見えないみたいだけ。・・・狸まだ反応してるの?」

「していろよ。」

「・・・つよし、倒してみるか。」

「え? 倒すって、殺すことだよ?」

「わかつてる。でもこれからのためにも慣れておかなきゃ。何があるか分からぬいし。」

「う、そつか。・・・頭ではわかつてんだけどね。」

「ああ、晴香は徐々に馴らしていけばいい。でもさ、俺は晴香を守らなくちゃならない。こんなよくわからない世界で生きていくためには、倫理観なんか捨てなきゃダメな気がする。とまどつて晴香に

なにがあつたら俺は、自分が許せないし許さない。」

「・・・仁。」

「命は軽いもんぢやない。そんなことは重々わかっている。でもさ、それよりも大切なものがあるなら、俺は容赦しない。」

晴香の言葉を待たずに俺は狸の方に歩きだした。

近くで見たら狸はもう死にかけていた。

俺が蹴り飛ばした部分は裂けていたし、木にぶつかった拍子に枝が刺さっていたのか、体には何本も枝が刺さっていた。

「ううう。」

正直すゞくグロい。

生々しい。

もう死にかけているようだが、野生の生命力というか、まだギリギリ生きているようだ。

エアロソードの効果が切れた木刀を、振り上げる。

「ファイアソード！」

木刀に手元の方から火がともる。

次第に刀身は炎に包まれ、チリチリと音を鳴らす。

「お前の命は俺の糧になる。晴香を襲つたのが運の尽きたったな。・  
・だから、お前の命を俺にくれ！！」

ジャシュツッ！！

斬つた切り口から炎が燃え上がり、次々と炎が肉片を包み込んでい

く。

・・・臭い。

草食だか肉食だか知らないけれど、肉が焦げる匂いつて、こんな臭かつたけ？

ああ。命つて、こんなに簡単に潰えるし、肉の燃える匂いつて本当は臭く、こんなにも禁忌すべき香りだったんだ。

・・・きもちわるい。

焦げかすの匂いが消えた頃、晴香が俺を抱きしめていた。

女くさく良いにおいの晴香は、よくわからないが泣いていた。

泣くなよという俺の言葉を無視して、ひたすら晴香は泣いていた。  
気が付けば俺の顔も、濡れていた。

塔が近くに見えてきた頃、俺達は町と言つていい規模の集落に辿り着いた。

大狸（俺命名）に遭遇した後、晴香の指示に従いながら俺達は塔に向かつたのだが、索敵の能力はやはりかなり優秀だった。

晴香は何度か俺達以外の生物を見つけたようだが、なんとか迂回して塔に辿りつけた。

正直あの大狸位だつたらなんとかできるだろうが、あの周辺に大狸より強い生物とかいたらマジ怖い。

それにあの時はキレって何にも考えていなかつたが、今考えたら命のやり取りはちょっと怖い。

とにかく本当に索敵は優秀だ。

まあ、なんとか人が居そうな集落には着いた。

その集落はさつきから見えていた塔を囲むように街並みが整えられ、良く言つても古き良き、悪く言つたら時代遅れの街並みである。家には煉瓦も使われておらず土壁であり、人智を尽くしたビルなどを見てきた俺からしたらやけに古くさくて地味な印象を受けた。

塔を囲むようにある集落の周辺をさらに土と石を使った壁で覆われているようで、門番がいる壁がない部分が森と集落の出入り口のようだ。

幸い集落に入るのに金などは必要ないようで、俺たちは無事に集落に入ることができた。

「いらっしゃい！」

「安くしとくよ。」

商売人のどんな世界でもよくあるありきたりな商売文句を背に受け、俺と晴香は人波をかき分けてメインストリートらしき通りを歩いている。

風景とは合致しないほどの人数の人がごつた返し、生活水準的にみれば明らかに今まで生きてきた世界より低い。メインストリートとおもわしき道を埋め尽くす人混みは絶えることなくはなくて、人口密度どれくらいだよとつっこみたくなるくらいの様子である。

街並みの中の店としては食べ物屋が多く、歩いている多くの人は食べ物が入った包みやクレープのようなものを片手に店を見ながら、思い思い過ごしているようだ。

俺たちは入口から三本に伸びた道の内一番大きな通りに足を進めたが、他の一本の道はまた違った店がきっと広がっているのだろう。とりあえず泊まる所を確保すべきだろう。

腹も減つたし何か買ったついでに聞いてみるか。

「晴香なにか食べたいものあつた？朝に果物食べただけだし、そろそろ腹減つたる。」

「そうだね。さつき会つたケバブみたいなやつがいいな。」

「・・・あ。」

「なに？」

「俺ら金なくね？」

「・・・あ。」

「・・・まずは金を稼ぐ必要があるな。」

「そういうえば、あのベンツて人が言っていた派遣会社ってあそこかな？」

「ホントだ。看板に派遣会社って書いてあるな。・・ってか、文字も日本語なんだな。」

「とにかく入ってみようよ。何か良い情報があるかもしれないし。」

「そうだな。入ってみよう。」

カラソカラソ。

扉を開けると少し鈍い音の鈴鳴り、俺たちがこの建物に入ったことを知らせる。

正面に窓口が二つ。

上には左から『登録』、『受け付け』、『支払い』と書かれた看板が掛かっていて、窓口のさらに左には大きめの黒板見たいなやつが置いてあり、紙が張られたり文字が書かれていたりしていた。

「ここは初めてか？」

背後からいきなり声をかけられた。

声をかけた人を見てみると筋肉質の背の高い、ちょっとゴツい男性が立っていた。

右胸には案内役といつこの人にはあまり似合わない札が付いていた。

「はい。そうです。」

「会員登録はしてあるか？」

「会員登録ですか？していないです。」

「そうか。見た感じ冒険者だらう？なら会員登録はしておいたほうがいいぞ。旅をする時の利点が多いからな。」

「利点ですか。どんな利点があるんですか？」

「何も知らないんだな。一番大きいのは身分保障と資源の買取が一割高くなったり、道具の販売価格が一割安くなるという売買的優遇だな。まあ、金がないやつから見たら、派遣会社に泊まれることが大きいようだがな。」

「結構利点が大きいですね。登録に何か条件はあるんですか？」

「登録にはないな。登録後に三ヶ月に一度一万円納めればいい。まあ、一万円程度なら何回か簡単な仕事をすればすぐに稼げるから、あまり気にすることもないだろ。」

「そうですか。登録する人は多いですか？」

「多いな。旅をしている人は大体登録しているし、町人も半分くらいの人人が登録している。小遣い稼ぎに簡単な仕事とかもできるしな。」

「そうですか。俺との子の一人なんですが、登録したいんですが。」

「

「せうか。じゃあ、一番左の窓口に行つてくれ。」

「わかりました。いろいろありがとうございました。」

「仕事だからな。気にしないでくれ。」

ゴツいのになかなか優しい案内の人から離れて、俺と晴香は教えてもらつた一番左の窓口に向かつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2472z/>

---

ダブルストーリー

2011年12月19日19時54分発行